

## 【全訳】

### 医学部のスキャンダル 怒りと精神的打撃

東京医科大学が数年にわたり、女子受験者の入試得点を故意に一律減点していた問題が発覚し、女性医師や同大の学生、受験生らは怒りや戸惑いを表明している。

同大学医学部が得点操作を行っていたことによる影響はかなり大きくなりそうだ。

「女性医師としての努力や志を踏みにじられた思いです」。関東地方にある公立大学医学部の付属病院に勤務する内科の女性医師(38)はそうため息をつく。

この女性医師は同大学の医学部で医師免許を取得し、大学の付属病院で研修医となった。大学卒業から4年目、専門医になるための研修中に結婚し、長男を出産。約半年間の育児休暇を取った。

そのまま辞めることも考えたが、思い直した。「自分の持てる専門知識と技術を生かして人の命を救いたい」と彼女は語った。

しかし、復職の現実は厳しかった。朝7時半からカンファレンス（会議）や打ち合わせがある。保育園に長男を預け、病院に駆け込んでからは夕方まで病棟の回診。そのほかにもカルテの作成やとりまとめなどの事務処理にてんやわんやだ。

患者の容体が急変し、残業が続いて帰宅が深夜になったことは数え切れない。

月に5回ほどの夜間当直があり、そんな時は一般企業に勤める夫に息子の世話を頼んだ。保育園のお迎え時間が近づくと、同僚の男性医師が残務を手伝い、救急患者への対応を代わってくれた。復職してから3年で無事に専門医となった。今も彼女は同じ病院に勤務している。

彼女が育児休暇を取得して以来、出産する女性医師が働きやすい職場環境が整って来た。患者一人に複数の主治医を置くようにするなどといった措置も取られている。

関係者によると、東京医科大学は女子受験者の得点を一律に減点するなどし、女子の合格者数をおおむね3割程度に抑えていた。受験生はそのことを知らされていなかった。

「女性医師は結婚、出産で離職したまま、復職しないことが多い」と同大関係者は話す。「男性医師の数を揃え、現場のマンパワーを確保したかった」。

先の女性医師は、同大学の女性志望者の扱いに関し、無念の思いを隠せないでいた。

「女性も医療の担い手に向いている。患者への思いやりやきめ細やかな対応が可能だ」と話す。「性別だけで（医師になる）機会を奪うのは、誰の得にもならない」。

「意欲が落ちる」

「女性だからという理由だけで入試に受かりづらいなんて許せない」と、福島市出身の女性(20)は述べる。

彼女は親が医師で、過去2年間に東京医科大学や慈恵医科大などを受験したが、不合格となった。

「志望校も決めなければならないのに、これでは勉強する意欲が落ちる」と憤った。

千葉県在住の女性(19)は、今年の東京医科大学と慈恵医科大学の一次試験を通過でき

ず、来年の再受験を決意した。

「女性医師が仕事を辞めがちなのは事実かもしれないが、変えるべきは医師の働き方の方だと思う」と彼女は言う。

東京医科大学医学科 6 年に在籍する男性(24)は、得点操作のせいで優秀なのに落とされた女子受験者がいるかと思うと、後ろめたい気持ちになったと言う。

「学校は得点操作について詳細に内部調査をし、現状を包み隠さず説明してほしい」と男性は述べた。

今回の問題を受け、林芳正文部科学大臣は木曜に「女子を不当に差別する入試は断じて認められない」と批判した。

この問題が発覚する以前から、文科省は東京医科大学に過去 6 年間の入試が適正に行われたかを調査し、報告するよう求めていた。

「不当な差別は許されない。報告の内容いかんによっては、大学への対応を検討するつもりだ」と、同省の大学入試担当者は話した。

同大学は、来週にも調査結果を公表する方針だ。